

肢端知覚異常症

| | |
|-------|---------------------------------------------------------------------------------------------|
| メタデータ | 言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属: |
| URL | http://hdl.handle.net/2297/37876 |

實 驗

肢端知覺異常症

富山縣病院 福田 美 明

肢端知覺異常症 Akroparästhesie od. Vasomotorische Neurose der Extremitäten ハ專ラ内分泌障碍ニ因スル血管運動障碍ト信ゼラル。

本症ハ一八六七年ノートナーゲルハ四肢ノ血管運動神經症トシテ詳記セリ、次デ一八八〇年ブットナム、一八八三年オルメロード、一八八四年ジングレル等本病ニ就キ報告アリ、其他一八八五年ベルンハルト、一八八五年サウンドバ、イ、ヨーネス、一八九〇年ローゼンバハ等ノ報告アリ、一八九〇年シヘルツ^H Schultze ガ Akroparästhesie ノ名稱ニテ本病ノ細密ナル研究ヲ遂ゲ爾來「アクロバレスデジ」ナル名稱ハ一般ノ通用學名トナレリ、其後フリードマン、フランク^L ホッポワルト等ノ研究アリテ一八九七年再ビノートナーゲル^N Nöthnagel ハ綜合的研究ヲ發表セリ。予ハ最近本症ト認ムベキ四例ヲ實驗セリ、左ニ其大要ヲ記シ少シク本症ノ原因等ニ就キ一言セント欲ス。

第一例 竹腰某女 三十二歳 かもじ職

体格營養中等父ハ七十八歳ニテ老衰死ヲ取り母ハ五十四歳死去、ヒステリー症ヲ有セリ兄弟三名ニシテ兄ハ四十二歳健康姉ハ四十一歳脚氣及ビ肢端知覺異常症ヲ有ス、既往ノ疾患、健康ニシテ大患ナシ時々肩癆胸部壓迫様感ヲ發スルコトアリ五年前長野縣下(信州)ニ居住ノ際寒氣甚シク爲ニ毎夕四肢ノ寒冷激痛惡寒冷汗浮腫ヲ來シ約二ヶ月間

ニテ治癒セリ然ルニ大正六年十二月當市ニ來リ二十年來ニナキ大雪ニ際シ寒冷ヲ犯シテ得意廻リヲナセシニ再ビ夕時刻ヨリ惡寒發熱頭痛全身倦怠ノ全身症狀ヲ發シ次デ下肢倦怠疼痛「チアノーゼ」ヲ呈シ漸時腫脹シ來リテ苦痛甚シキモ朝ニ至リテ症狀消退ス呼吸器消化器ニ異常ヲ認メズ腱反射普通ナリ血壓百十密迷突、尿ニ異常ナシ。

第二例 花塚某女 四十二歳 かもじ職 第一例ノ姉

体格營養可良胃症ヲ有シ毎年夏季ニ重症ノ脚氣症ヲ發ス本年冬寒冷ノ爲カ夜間下肢ニ糜感ヲ來シ次デ刺痛アリテ睡眠不良トナリ苦悶ス心臟ハ肥大シ心悸亢進ス腱反射ハ消失シ尿等ニ異常ナシ。

第三例 堀某男 三十歳 官吏

大正四年來神經衰弱症ニ罹リ所々ノ神經痛アリ殊ニ下肢ニ疼痛ヲ訴ヘ歩行困難ナリ体格營養佳良本年一月來朝ノ寒冷時ニ執筆書字ヲナスニ右手第四指根ニ當リ疼痛ヲ發シ第四指及ビ第五指内側ニ波及シ漸時手ノ厥冷紫藍色ヲ呈スルモ漸々輕快スルヲ例トス心臟ハ稍々肥大シ心音ハ不整ナリ尿ヲ檢スルニ多量ノ磷酸鹽類ヲ認ム蛋白、糖ヲ認メズ。

第四例 若松某男 廿九歳 佛壇職

生來健康昨年或事柄ニ就キ甚シク精神感動アリ卒倒セントセシヨリ以來上昇卒倒恐怖アリテ外出セズ仕事中本年二月來右手第四第五指ノ蒼白色疼痛發作アリ次デ右眼周圍ノ激痛發赤アリ眼球ハ朱ヲ點ゼシガ如ク潮紅シ約二三時間ニテ消退ス尿ニ異常ナク營養不良ナリ他ノ臟器ニ異常ナシ。

以上ハ予ノ實例ニシテ是ヲ記錄ニ徵スルニ本病ノ原因ハ未ダ一定セズ多少、性及ビ年齡ニ關係シ添因トシテハ寒冷ナル時期ニ最モ本症ヲ發シ易キガ如シ本症ノ大多數ハ婦人ニシテコリンズノ統計ニ從ヘバ婦人ハ全患者數ノ七〇%ヲ占ムト年齡ハ三十乃至六十歳ノ間ニ發シシユルツエハ常ニ三十歳臺ニ發病スト稱シクルハシユマン婦人ハ多ク破瓜期ヨリ經閉期ニ來リ男子ハ或年期ニ來ルト稱ス予ノ四例ハ又是ニ一致ス然レドモ幼年ニモ來ルモノニシテフランクホッフルトノ十二歳、クルシユマンノ十歳、カッシーレルノ十六歳及ビ七歳ノ少女、ストルツネルノ二歳ノ小兒ニモ發セシト

云ヒ最高年齢ニテハクルシユマンノ七十二歳ノ女子ニ本症ヲ實見セリト云フ。

職業ノ關係ハ勞働階級ニ來リ殊ニ水仕事又手職ヲ行フ者ニ來リ就中寒冷ナル時期ニ働クモノニ來ルコト多シオッペンハイムハ夏日發汗セル手ニ氷片ヲ握リテ發病セシ一例ヲ報告セリ。

生殖器ノ關係ハ經閉期ニ最も多シトハオッペンハイム、シュルツ、フリドマン、ラクエル、バルンハルド等ノ唱フル所ナリクルシユマンハ生殖器成熟期ノ十歳臺ニ最も多ク次デ經閉期是ニ次グト稱スルモ經閉期後ト雖モ發スルモノトス、サレバ生殖器障病ニヨリ神經衰弱症ヲ惹起シタル婦人ガ或ル機會動機ニヨリ本症ヲ發スルモノナラン。

其他血行器障病ニ貧血、胃症、中毒、精神感動内分泌障病ハ本症ノ原因ニ關係アルモノト稱セラル殊ニ寒冷ハ本病ヲ發シ易シ予ノ四例ハ寒冷時ノ步行作業ニヨリ發生ス。

遺傳ハ關係大ナルモノノ如ククルシユマンハ血管收縮性ノ家族ヲ見、ディールハ家族中ニ尋麻疹發赤質匍行疹神經性浮腫ノ多數ヲ實見シ予ノ例ハ姉妹ニ同症ヲ發シ血族の關係ヲ明示ス。

土地ノ關係ハ地方ニヨリ病型異ナルト稱セラルルモノ例ハ(信州富山)大差ナク唯寒冷ノ土地ニ發生スルコトヲ證ス。

部位ハ最も多ク兩側ノ手ニシテ一手ハ他手ヨリ常ニ強度ニ侵サルト稱ス予ノ例ハ女子ノ第一第二例共ニ下肢ニ來リ男子ハ二人共右手(右利)ノ第四第五指ニ限局シ彼ノフリードマンノ尺骨神經領域ニテ第四第五指又ハ第五指内側ノミ侵サレタルヲ見テ一定ノ神經ニ限局スルコトヲ主張セルガ如ク殊ニ第四例ハ右ノ前頭部特ニ右眼窩部ニ限局シテ發赤疼痛發作ヲ來スハバレットノ舌及ビ口唇ニ限局シデエルニー、エッゲル、ピック、トロンベルト等ノ一定神經支配下ニ來ルトノ報告例ニ類似ス。

本病ハ其症候徐々ニ發シ稀ニハ急ニ發ス予ノ例ハ急ニ發スルモノニシテ 一、異常感覺(ムツ癢キ感、蟻走感) 二、疼痛 三、知覺障病(知覺過敏殊ニ鈍麻) 四、血管運動性障病トス予ノ四例モ疼痛異常感覺高度ノ血管運動性障病ア

リテ「チアノーゼ」冷感浮腫運動拙劣部強硬感ヲ訴フ。

右ノ症狀ヲ基礎トシテハスコベックハ本症ヲ分類シテ、

- 一、血管運動障礙ヲ伴ハザル異常感覺(シュルツ^エ型眞性アリロバレスラジー)、
- 二、原發的ニ異常感覺續發的ニ血管運動性障礙殊ニ血管擴張神經營養神經ノ變化(ローゼンバツハ型)
- 三、原發的血管運動性障礙續發的異常感覺(ノートナーゲル型)ノ三トス。

カッシーレルハ一、知覺神經症(單純ナルシュルツ^エ型)ト、二、血管運動知覺神經症(ノートナーゲル型)トノ二トス。予ノ例ハ第一例ハロゼンバツハ型第二例ハシュルツ^エ型第三例第四例ハノートナーゲル型ニ相當ス。

本病ノ病理ニ至リテハ學說紛々其眞想ハ混沌トシテ窺知スルヲ許サズ或者ハ「ヒステリー」又ハ神經衰弱症ノ一分症ナラズヤト稱スルモシュルツ^エ、ベルンハルドハ是ニ反對ス然レドモ一般神經症ヲ基礎トシテ成立セルモノナルコトヲ忘ル可ラズカッシーレルハ患者ノ六五%ハ一般神經症ノ徵ヲ有スト殊ニ予ノ二例ハ「ヒステリー」症二例ハ重症ノ脚氣症ヲ有スルハ興味ヲ呼ブモノトス殊ニ四例共寒冷ニ際シテ發病スルヲ見バノートナーゲルノ動脈痙攣ヲ本症ノ基礎トナスノ說ニ賛成セザルヲ得ズ。

經過ハ記述ノ如ク一過性ニシテ然モ間歇的ニシテフリードマンノ說ニ一致シ四例トモ温暖期ニ會シ輕快又ハ全治セリ。

本病ト鑑別ヲ要スベキ一般ノ神經炎結核患者ニ來ル末梢知覺障礙ハ神經幹ノ變化及ビ肺炎炎等ノ合併症ニヨリ鑑別スルコトヲ得ベシ其他職業的的神經症其發生ノ具合ニヨリ明ニシテ本症ハ輕易ノ仕事殊ニ是ニ附隨セル冷水作用ヲ原因トス其他、「ヒステリー」ニ來ル知覺異常症、「アクロメガリー」ノ初期知覺異常、レノー氏病、「エリトロメラルギー」等ハ自ラ其經過症候ヲ異ニス其他肢端ニ疼痛ヲ發スル脊髄癆、ギヒト、動脈硬化、神經痛等ハ反射關節ノ形狀年齡部位ニヨリ區別シ得ベシ。

是ヲ要スルニ予ノ四例ハ年齡ハ壯年ニ來リシユルツエノ說ニ近ク職業ハ局部ノ過勞寒冷曝露ノ場合ニ來リ發病時ハ寒冷期(本年ノ如キ例外ノ寒氣)ニ發シ經過ハ一過性ニシテ然モ間歇的ナルコト(フリードマン)ノ說ニ一致ス遺傳及ビ神經症ハ予ノ例ニモ見ルベク發作時ハ夜間及ビ朝ノ氣温低キ時ニ發ス。

以上ヲ綜合結論スルニ予ノ例ハ例外ナル本年ノ寒氣ニ發シ殊ニ歩行執筆等ノ後ニ來リ然モ氣温低キ夜間又ハ朝ニ一過性ニ發作スルモノニシテ全クノ一トナーゲルノ稱スル動脈ノ痙攣ヲ以テ本症ノ基礎ト見做スベキモノトス。(以上四例トモ其後今日ニ至ル迄同症發作ヲ認メズ)